

著名的無名人 を訪ねて

text by
Nagano Yoshinobu

連載 第一 201 回

日本再生に「氣」と「技」を賭ける達人たち(その1)



永野 芳宣

ながの よしのぶ

1957年生まれ、東京電力の理事兼企画部長、常任監査役、特別顧問、政策科学研究所副理事長、九州電力株主名簿管理センターを継ぐ現在、IT系特別顧問、矯正電気機械製作所経営顧問、立山科学センター顧問、九州電力特別顧問、国土交通省研究開発事務局局長など。

「外伝 抗した男(角川書店)」「小説 古河市長(中央公論新社)」「日本型スタートアップ経営(ダイヤモンド社)」「明徳経営塾(中央公論新社)」「日本の著名的無名人」(1)、「(伊集院研究所)」「物語の時代(1)」「(中央公論新社)」「株式会社が日本を変える」(産経新聞出版)」「蒲島郁夫の志」(伊集院研究所)」「目指せ日本だ」(3)」「日本(2)に負けず」(同上)」「クリエーターと国家の戦略的構想」(同上)」「脱原発は日本国家の恥」(同上)」「送電分離は日本国家の命脈」(同上)は必読多数。

経営者に休みはない という人生の覚悟

前回から、蒲島郁夫熊本県知事の軌跡を追うと同時に、鹿児島県志布志市に新たな日本農業再生の夢を実現しつつある、農業生産法人社長の坂上隆を典型的な著名的無名人の一人として取り上げることにした。

この2カ月は、新たな著作のテーマにかかわり、異分野の勉強のために古本屋を含めて駆

け回り、買って来た本を半徹夜で読む。それだけでは飽き足らず、本で知った現場に出掛け、うちのカミさんには内緒だが、いつものパターンなのでどうやら勤付しているようだ。内容は秘密だが、漸くテーマも決まって、我ながらの一瞬の武者修行という名の《あそび》も終わったため、5月中旬の日曜日に、坂上隆に電話をかけてみた。

「あー、先生ですか。元気です

よ」と、いつものクールな返事があった。「相変わらず忙しいんだね、日曜も出勤してるの？」と聞くと、「農業の経営者は、24時間いつでも責任がありますから」と、きっぱり言う。これが、今時の普通の若者には出来ない、坂上隆の生き様であり、人生の覚悟である。

もちろん、一つのことをやり上げた後は、部下に任せて短い休暇を取る。先ほどの私のあそびという名の休養と違って、彼

の休養はこれまたリーダーとしての、言ってみれば農業経営の一環である。僅か数日だろうが、彼が「頼むぞ」と言っている間は、従業員の「和」で自分たちがそれぞれ経営者になったつもりで、責任を持って自然の掟と格闘してみろというのである。

農業とは、「生きている自然」が相手なのだ。自然は、四六時中変化し止まる事がない。最近、日本の標準時間を2時間早

めると、日本から仕事や事業が始まるという話が、アベノミクスの効果を上げるために出てくるそうだ。なるほどと思うが、農業にとってはそんなことは、とづくに実践していなければ、この競争の激しい世の中に勝てるはずがない。

農業と水と電気の 結び付き

少し前だが、熊本の蒲島知事こんな逸話を紹介した。24歳



さかうえの耕作農地での坂上氏と従業員

でネブラスカ大学農学部に入学するために再渡米し、その後学生結婚した蒲島は、指導教官のジーマン先生が飼っている研究用の豚の面倒を見ていた。ある日、友人と釣りに出かけていて、《給水》をするのが遅くなった。このため、飼育している研究用の豚が死にかけた。夜中に懸命に奥さんにも手伝ってもらい、豚に給水して廻った。真夜中に、やっと「命の水」を

貰った豚の親子が、時ならぬ歓喜の鳴き声を挙げたため、夫妻が豚泥棒と間違えられ警官に撃たれそうになったという話だ。

今、この話を思い出したのは、あらゆる生物にとって《水は命》ということをおうと思つたからだ。

アメリカ大陸の広大な高原地帯で、大規模農業の

現実と格闘してきた、当時の蒲島青年も、この当時先ほどの豚の飼育だけでなく、トウモロコシや大豆や麦等の育成のため、給水や排水には苦勞して来たと思う。

坂上が、鹿児島志布志市で390カ所の、それぞれが数十アールずつの分散錯圃、合計約90畝(作付面積あるは耕作面積は150畝)春作、秋作というように年間2回転させている圃場もある為を耕して運営をしている農場の管理も、給水については苦勞していることだろう。

同時に、彼が最も力を入れているのは、ITを活用した効率的な食物の育成管理である。特にビニールハウスの中での、温度調整や給水・配水に《電気》は欠かせない。それには、どうしても低廉かつ電圧や電流の流れが狂わないような、要するに供給信頼度の高い電気が必要である。もちろん、停電が一番怖い。最近しきりに喧伝されている、天候に左右されがちな、太

陽光発電や風力発電などが主流になってくると、先ほどの「水」と共に「電気」が低廉安定かどうか、《農業という事業》の死命を制することに成り兼ねないということだろう。「農・電・水」は、一体なのである。

電話でこのところの状況について尋ねたところ、「お陰さまで、新卒者を含めて7名が入社し、49名になりました」と、元氣な回答が返ってきた。

ちなみに49人のつわものたちの平均年齢は、42・9歳だという。しかも女性が11名、5人に1人の割合である。約50人の集団だから、これからは、むしろ普通の会社と同じく、労務管理も重要だろうと思つて尋ねてみた。

「もちろん、そうですよ」と言った。

しかし、彼は自信満々のようであった。なぜか。それは社長の坂上が、常に平常心で、自分が行っている「農業哲学の《氣》」を、50人の集団に呼び掛けているということに尽きる。